

「サッカーのゲーム分析を通じて競技力を向上させるために」

— 自主的に目標を具体化させていく —

サッカー専門部  
山形県立長井高等学校  
井上 大介

## 1 はじめに

1993年にJリーグが発足し、サッカーをTVやニュースで観る機会が格段に増えた。さらに2002年の日韓共催W杯で日本代表クラスの試合はほぼ放映されるようになった。私が高校生の頃、サッカーを観戦した翌日のグラウンドでは、よくプレーを真似して、チームメイトと評論家のように語り合ったものだ。しかし、本校サッカー部員には、全く試合を観ない者もいたり、日々の2時間半の練習以外全くサッカーに興味がない者もいた。この状況を打破すべく、サッカーノートや部日誌、月間の予定表に日本代表やJリーグの試合日、IHや全国サッカー選手権の日程を入れたり、試合を観た感想を書かせたりしていたが、なかなか変化が見られなかった。

そこで、今回は、漠然と試合を見せるのではなく、試合を分析する視点を与えることで、部員のサッカーに対する関心を高めようとした。それによって自分のプレーを多角的に捉え、目標を自ら定め、努力していくことでレベルアップにつながるのではないかと考えた。

## 2 研究の方法

### (1)調査方法

夏のIHと冬の選手権の分析結果を参照し、本校のチームの課題に合わせた項目を設定し、その項目に対して、部員自らがゲーム分析を行い、部員の言動の変化を観察する。

### (2)調査対象

山形県立長井高等学校サッカー部員(2年生13名、1年生13名、女子マネージャー1名、計27名)

### (3)調査期間

平成21年8月～平成22年2月

### (4)調査内容

以下の記述内容による。

## 3 結果と考察

### (1)結果

#### ①ゲーム分析の項目について

財団法人日本サッカー協会技術委員会が報告している全国高校サッカー選手権大会の「テクニカルレポート」の中に、相手に渡る最後のパスの軌跡の始点と終点(シュート・ドリブルも含む)と4本以上パスが繋がった回数の記録からの分析が掲載されていた。FIFAの規定によると4本以上のパス成功でポゼッションが成立するとのことだった。さらに、このレポートの中で、攻撃の戦術を3つに分類している。

- I. ビルドアップ型の攻撃で、DFラインからボールを繋いで攻撃を組み立て突破のチャンスを窺うスタイル。
- II. 半ビルドアップ型の攻撃で、DFラインではボールを大切にしているが前方へのパスはロングフィードのパスで、配球後は攻撃にあまり関わらずリスクを避けるスタイル。
- III. ビルドアップしない攻撃で、ノージャッジで前方へボールを蹴り込みセカンドボールを奪って攻撃に繋げるスタイル。

加えて、「テクニカルニュース Vol.33」では、以下のようなデータ(表1)も掲載され、「ボールの支配率の高さが直接勝利に結びつくとは言い難い。守備から攻撃への切り替えを速くし相手の守備が整わないうちに得点を挙げるといった試合運びが合理的であることは否定できない」と分析していた。そこで、これを手本に上記の「テクニカルレポート」のデータを用いて以下の表を作成した。

表1. 平成21年度全国高校総体でのポゼッション成立数と試合結果

決勝	前橋育英(44)2-0(4)米子北	
準決勝	前橋育英(26)1-0(8)大津	米子北(1)1-0(15)佐賀東
準々決勝	前橋育英(16)2-1(14)神戸科技	米子北(2)2-0(5)中津工・東
	大津(8)2-0(7)玉野光南	佐賀東(5)3-2(27)一条

表 2. 平成 20 年度全国高校サッカー選手権でのポゼッション成立数とシュート数と試合結果

決勝	広島皆実(16)[13]3-2[11](7)鹿児島城西	
準決勝	広島皆実(24)[20]1-0[3](15)鹿島学園	鹿児島城西(9)[24]5-3[23](19)前橋育英
準々決勝	広島皆実(21)[15]2-0[4](4)四日市中央	鹿児島城西(7)[15]6-2[10](14)滝川第二
	鹿島学園(18)[4]2-1[8](25)大津	前橋育英(21)[25]1-0[5](14)國學院久我山

( )…ポゼッション成功数、[ ]…シュート数、中央の数字がスコア

シュート数もデータに入れたのは、サッカーでは、1 点の重みが非常に大きいという理由と、もう 1 つは、本校の新人戦や県リーグなど公式戦の結果から、ボールを支配したり、シュートを散々打ちながらも 1 点が奪えず負けた試合を経験してきたためである。

そこで、試合を観ながら簡単にチェックできるゲーム分析シートを作成した(図 1)。シートに時間軸を設けたのは、試合の流れやそれぞれの時間帯に合わせて出現しやすいプレーの特徴なども分析できるのではないかと考えたからである。

## ②ゲーム分析の実施

冬休み開始から選手権決勝のある 1 月 11 日までの期間に、各自好きな試合を最低でも 3 試合観て、それぞれの試合について感想や見習うべき点などを書かせていた(図 2)。以下に、その中から今年度の選手権決勝に対する感想を抜粋した。

「サイドチェンジがすごいと思った」

「球際が強い」

「判断が速い」

「みんなが動くサッカーをしていた」

「ボールをもらう前に周りを観ている」

「ボールを取られても取り返すプレーがあった」

「全員で守って、全員で攻めるという強い意識を感じた」

「一人ひとりが決勝の中でも自分のプレーをしていた」

そこで、部活動のミーティングの時間を利用し、全員で再度選手権決勝の録画を観戦し、その中で前述の図 1 のように作成したゲーム分析シートを配り、各自に分析項目をカウントさせ、最後に試合の感想を書かせた。その感想には以下のようなものが出てき

長井高校サッカー部ゲーム分析シート

年 月 日 <大会名>			
<天気>	<気温>	<風>	<ピッチ>
晴	曇	強	主 悪 / 良好 不良
雨	雪	弱	
曇	霧	無	
チーム名	vs		チーム名
ポゼッション数	シュート数	得点	シュート数 ポゼッション数
		前半	
		0分～15分	
		15分～30分	
		30分～45分	
		後半	
		0分～15分	
		15分～30分	
		30分～45分	
		合計	
<感想>			

図 1. 今回作成したゲーム分析シート

観戦レポート

<大会名>	【印象に残ったプレー】
<年月日>	
<スコア>	
チーム名	チーム名
勝	
敗	
PK	
<hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/> <hr/>	

図 2. 今までの観戦レポート

た。

『速い攻撃とゆっくりな攻撃があった』『切り替えが速く、簡単に繋がせてくれない』  
『強いチームはもっと繋いでいるのかと思った』『パス(を繋いでいくこと)って難しいんだな』  
『ポゼッションからシュートで終わってるシーンは4回しかなかった』  
『立ち上がりはポゼッションしないでシンプルだった』『後半疲れてくるとポゼッションが増えた』  
『カウンターは2、3本のパスで』『ドリブルが有効だった』  
『FWのポストプレーって大事なんだと思った』

### ③最低目標の設定

先ず初めに、最低目標とは、相手に左右されずに自分がいつどんな時でもやれる最低限やれる目標のことである(資料1)。冬休み明け1月4日と1ヵ月後の地区のフットサル大会後2月6日に目標の設定・更新を行い、一覧表に全員の最低目標をまとめ、チーム全員で目標の共有を行った。この最低目標が、1月18日にゲーム分析を行う前と後では以下のように変化がしていた。

「攻守の切り替えを速くする」⇒『守備への切り替えを特に速く』  
「常に走る」⇒『スペースを探して走る』  
「声を出す」⇒『サポートの声を出す』『切り替えさせる声を出す』  
「DFを速くする」⇒『1歩目を速くする』『パスカットを狙う』  
「スペースを探す」⇒『ゴールに向かえるスペースを探す』

最高目標…最終到達目標、完璧なイメージ、最高の状態。

「チームの勝利」はもちろん「ハットトリックする」「1vs1で絶対負けない」など

最低目標…最低限の目標と同義。自分がいかなるコンディションにあっても、どのような相手と対戦するときでも、変わらずに実行できる最低限のベースラインのこと。

「走る」や「声を出す」など

⇒いつでも、どんなコンディションでも、自分自身でコントロールできる行動なので最低目標になりやすい

「点を取る」や「無失点」など

⇒どんなに低いレベルの目標だと感じて、結果は対戦相手に左右されてしまうので最低目標にふさわしくない

高い目標を持つことは良いが、真面目な選手ほど「失敗は許されない」と身動きが取れなくなる場合がある。だから、最低目標に集中し、「できなかったこと」から「できること」を意識することで、「今、この環境の下で自分がやれる“仕事”を“コツコツ”こなそう」と前向きな思考になる。

さらに…“最低限できること”のレベルを上げていく。

それぞれの最低目標をチーム内で公表しておく。

資料1. 「最低目標」と「最高目標」について(布施努『ホイッスル！勝利学』より抜粋)

(2)考察



また、「声を出す」など目標が同じで変化のない部員でも、「声を出しやすい環境や雰囲気を作る」や「率先して自分がやってみる」など自分が取り組む姿勢から反映されるものに目が向いたり、練習の雰囲気に厳しさが出てきたり、プレーに対する責任感などプラスの変化が見られた。また、結果的にハーフタイムや練習中のインターバルの中でも、話し合ったり、確認し合う材料が増えたりと雰囲気の活性化に繋がったものと考えられる。

学校の雰囲気やチーム自体、さらに部員一人ひとりについても非常に真面目な生徒が多く、資料1にあるように「ベストを尽くす」ことが「ミスが許されない」にすり替わり身動きが取れなくなったり、本番に弱いこともチームの特徴であったので、最低目標の考え方は日々の指導の際も非常に参考となった。

#### 4 まとめ

ただ漠然と試合を観て感想を言い合うのではなく、ゲーム中に現れる何かの現象をカウントしていくことだけでも部員の言葉や感想が変化し、考えを深められることがわかった。だからこそ、総体と選手権の客観的なデータを部員に伝達し、分析項目を模索することは有効である。また、今回の数値から両チームの攻撃のスタイルや切り替えのスピードが分析でき、試合の流れや展開を予測するデータとして有効である。さらに、自分たちの特徴を感覚的でなく数値化して知ることができ、次の試合に活かしたり、自分たちの成長の度合いを測ったりする利点も生まれた。ハーフタイムの指示などにも利用できれば、相手のチームの特徴も一緒に把握でき、より具体的な指示や指示の具体的な根拠が見えやすくなる。

最低目標の考え方も本校部員には適しており、日々の練習での意識、ゲーム分析で得た新しい刺激とを繰り返していくことによって競技力が向上していくものと考えている。

最後に、今回このような研究の機会を与えていただき、自分の指導や部員の様子をもう一度確認することができ非常に感謝しております。これからも今回行った分析や目標設定を利用しながら、さらに改良を加え、部員ともに努力していきたいと思っております。

#### [参考文献]

○「第 87 回全国高校サッカー選手権大会テクニカルレポート」

財団法人 日本サッカー協会 技術委員会・全国高体連サッカー部 技術委員会

○「テクニカルニュース Vol.33」

小野剛(財団法人 日本サッカー協会 技術委員会)

○『ホイッスル！勝利学』

布施努(集英社インターナショナル)